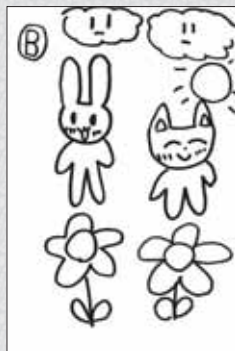


▼小学5年生当時の写真(右)。家族旅行で東京へ行ったとき一枚。妹さんの隣で帽子と短パンが決まっている、お兄ちゃん。



中村 美月 さん



奥村 葵帆 さん



P.N. ハンコック さん

イラスト
コーナー

イラストは
たてに描いてね

このコーナーでは、みなさんからの郵便をお待ちしています。どんなことでもかまいません。どしどしお送りください。広報クイズの答えもお忘れなく。

《あて先》〒861-3296 御船町役場「おたより」係 ※住所を書かなくても届きます。

《Eメールアドレス》 kanri@town.mifune.lg.jp

※匿名希望の場合は、氏名の横にその旨を明記してください。ペンネームでもかまいません。

まちへのラブレター

みなさんからの郵便をご紹介します。

広 報みふねは情報源となっております。兵庫県の伊丹市に住んでいた時も伊丹市の市報も情報源でカレンダーに書き込んでいました。紙の質も良くもったいない気がしますがこれだけ写真があれば納得です。これからも町の声をひろいあげて町民に知らせてください。

(小坂・Sさん)

広報で得た情報をカレンダーに書き込んでいただいているとは作る方としてはうれしいことです。広報担当としてはできるだけ写真を書くことが一番です。町民の皆さんに分かりやすい、親切な広報紙作りに心がけていきます。これからも紙面へのご意見をお待ちしています。

(広報担当)

毎 月広報を楽しく読んでいます。昨年からなんとなく短歌を作るようになり、日記代わりに感じたことを短歌にしています。下手でも面白くて…短歌コーナーに目を通すようになり、七滝出身と書かれていてびっくりしてしまいました。あこがれの歌人が熊本出身とは知っていましたが、七滝出身だったんですね。広報ならではの御船に縁のある人の情報これからも楽しみにしています。

(滝川・Uさん)

熊本県出身ということをご存じの人も多いのですが、御船町の七滝出身であることを知らない人もいらっしゃるようです。七滝には幼少の頃数年在住しておられたようです。ひとひねりの短歌の会の皆さんも別れをしのんで歌をつくられました。素晴らしい女流歌人の出生の地であることを誇りに思います。

(広報担当)

先生の青春昔話

町内に勤務する先生に、子どものころの思い出を話してもらうコーナーです。

七滝中央小学校 村田 裕紀 先生
(嘉島町出身・35歳)



担任の先生にべったりだった
少年時代

嘉島西小学校で5・6年生の担任の先生との思い出がものすごく印象にあります。初めて男性の担任の先生で、休み時間も授業中も先生になつきまくってました。登校したら、まず職員室の先生のところに行つて、「遊びましょう」と声をかけます。休み時間は、野球やサッカーをして一緒に遊んでもらいました。運動が苦手だった自分に、ペランダで竹馬の特訓をして、乗れるようにしてくださったことを覚えています。先生から給食の時間にしかれたこと、体育のボール運動で褒められたことなど具体的に覚えています。今、自分が教師として子どもに教える立場になりました。子どもにとって、教師の一言一動の重みを感じています。昨年、研究授業で自分の授業を恩師に観てもらったときは、なんとも緊張しました…。

文芸

ひとひねり

短歌

落葉散る万の金色舞いて散る敷き積む道を夕日が照らす 藤本 京子
下枝の柿の実下校の子供らへと 祖父は年毎残しおきたり 正宗タツ子
あちこちとシャッター開かぬ店目立つ何処行きしかあの賑わいは 山本志満子
音もなく時間過ぎゆく里山に月ばかりぬ思はぬ位置に 市川 結子
短歌会にパラダイスもあり師の口演時間も楽しや夕日傾く 甲斐レイ子
「見てごらん」起き抜けの視野はまっ白な雪のうっし世、気付けばひとり 金森 英子
師走風宅急便を追いかける人影まばら里の寒さよ 北村ヤヨイ

俳句

御船春菊句会 大坪路子選

静かなる夜を灯して毛糸編む さんとうともこ
福耳をちらははに謝し初鏡 一つのひろ
寒風の絡む電線田圃道 丹生 則子
老いてなは夢の数々年迎ふ 緒方 新
背伸びして日のある枝に初みくじ 緒方 宣子
玄関の声華やぎて賀客かな 常石 和子
年月の重みそれぞれ賀状来る 渡辺ケイ子

肥後狂句

天狗会

なんぞん好き あんたにや食わせがいのある 坂本 周礼
行ったり来たり 何忘れたか探しよる 増永 笑和
忙がしき 化粧半分ぬたくつて 平野 千鶴
なんぞん好き 娑婆極楽の脳天気 鳥井 蘭
忙がしき 晩のおかずは手抜きよう 江藤 お竜
残り物 掘り出し者のおらしたぞ 吉田 楽園
覚めました 尽くすだけなら馬鹿らしく 河地 ゆき
計算通り 息子家族が同居する 作田 お光
忙がしき 合間合間のトイレ行き 鈴木 千春

一般投稿

少ないつもりで多いのが無駄 内村 孝子
よちよちと幼な手合はす男のひ孫見ずして逝きし 亡夫に見せたや 松岡 文江
異常だね、今年の暑さすごすぎてきれいな十五夜の月を眺める 川口 勝行
雨降りにかさをさしての墓まいり善乃丞氏のうれし涙か 川部 寅男
鮮やかに燃える紅葉に魅せられて時刻を忘るる旅の楽しさ 其川喜代子
ソーめんを欲した母の百二の人生あれが最期の食事になるとは 北川内宗郎
草原の草スキーに集まる子供らの歓声と親の笑顔がはじける 倉本 幸治